

【実践報告】

「教育実習Ⅰ（幼稚園）」の報告

広島文教大学教育学部教育学科

教授 上村 加奈 教授 杉山 浩之 教授 田中 崇教
准教授 牧 亮太 講師 平山 裕基

1 はじめに

本学では3年前期から4年前期にかけて、教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを段階的に履修する。教育実習Ⅰは3年前期科目である。本学の特徴的な取組といえる1年後期科目「幼児の理解」、2年通年科目「幼児教育の体験活動」を履修し、幼児理解に基づく幼児教育の理解を図っている。

教育実習Ⅰは学内での学修を基本とし、幼児教育の基本に基づく実践力を養成することを目的としている。続く教育実習Ⅱ（幼稚園での2週間の実習）を見据えている。そこで、授業のねらいを教育実習Ⅱに臨む前に実践力を培うとしている。

現在の教育課程による実践が5年目となる。成果と課題を分析して、今後の取組に活用したい。

2 実施概要

（1）実施スケジュール

授業内容は、指導計画案（以下、指導案と略記）の書き方と内容検討、模擬保育、学びの振り返りで構成している。授業内容によって全体指導とグループ別指導の形態を用いている。

授業内容とスケジュールは次のとおりである。

授業形態	授業回	主 な 内 容
全体指導	第1回	オリエンテーション（教育実習Ⅰの位置づけ 授業のねらいと概要・実習資格）
	第2回	指導案立案の要点 模擬保育Ⅰ指導案の内容 指導案検討
グループ別指導	第3回	模擬保育Ⅰ指導案検討（教材研究、遊びの展開）
	第4～8回	模擬保育Ⅰ・実践の振り返り/指導案検討
全体指導	第9回	模擬保育Ⅰのまとめ 模擬保育Ⅱ指導案検討（教材研究 遊びの展開）
グループ別指導	第10～14回	模擬保育Ⅱ・実践の振り返り/指導案検討
全体指導	第15回	模擬保育Ⅱのまとめ・総括 教育実習Ⅱに向けて

（2）本年度の運営ならびに指導上の特徴

1）保育実践と検討の充実を図るためのPDCAサイクル

本科目を履修することにより、①幼児教育の基礎理解・幼児理解②指導計画案を立案する力③教材研究をする力④遊びを展開する力（幼児の様子を観察し、実態把握をする力・幼児の実態に応じて働きかける力・集団と個人に対応する力）⑤基礎技能を培うことを目指している。

履修学生を5グループに編成したグループ別指導により、授業到達目標の達成度の向上を図っている。グループ別指導では、指導案検討と模擬保育を行う。指導案検討はゼミごとのグループ分けとし、各指導案検討グループから1～2名で編成したメンバーで模擬保育グループを作った。指導案検討グ

ループは、保育内容の五つの領域を意識した遊びの内容で指導案を作成することとした。「保育内容の指導法」の学びを踏まえ、学外実習で指導案を作成する際に主活動を偏りなく設定することをねらった。

グループ別指導時の授業形式は、前半に模擬保育グループメンバーで作成した指導案を基に模擬保育を行い、保育実践内容を振りかえって学びを深める。後半に指導案検討グループメンバーが集い、各模擬保育グループの実践と協議内容を報告する。学びを活かして次回以降の指導案検討を行うこととした。更に今年度は、実践後の協議の時間を設定し、時間内で闊達な意見交流により理解を深めた。

昨年度から引き続き、改定指導案の内容を充実させることに重点をおいた。作成した指導案を基に模擬保育を行い、保育実践内容を振りかえって学びを深める形式で授業を行うため、学修した内容を改定指導案に反映させることとした。模擬保育の協議内容を、各自が指導案検討グループに報告するというワールドカフェ形式を取り入れ、履修者全員が報告者となる。言語化することで経験したことが整理され、他グループの報告と比較して相違点や類似点を見つけることにより、保育実践の基本や遊びの内容による留意点を明確にした。実践前の指導案と改定後の指導案の違いを把握させ、学んだ内容が意識できるようにした。また保育実践を撮影して、実践後の協議ならびに指導案検討に活用した。

2) 課題把握による改善案検討の仕組みづくり

模擬保育の前には、事前に保育室の環境づくりと教材等の準備をする。環境を整えて模擬保育を開始する、幼児役の学生が模擬保育実践者の指導案を熟読して模擬保育に臨むため、事前学修を授業開始前に指定された教室で取り組むこととした。開始前に各自が課題を考え、疑問点を確認して模擬保育に臨む。

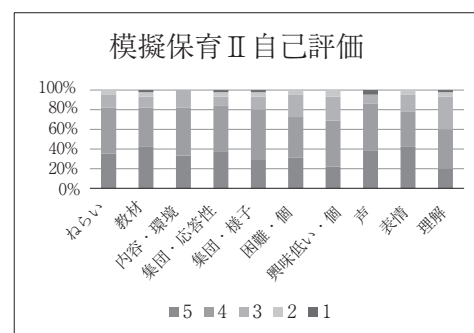
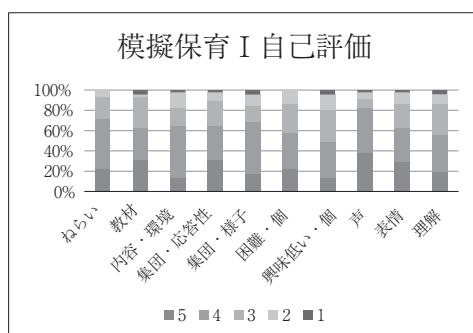
模擬保育の様子を動画撮影することで振り返りに活用した。第1回授業で撮影することの確認とデータの取り扱いの指導をした。実践の振り返り場面で用い、事後学修時に見直すことで自身の成果と課題を確認する資料とした。

3) 自己評価票と振り返り内容の集計結果（回答者45名、回答率100%）

模擬保育Ⅰと模擬保育Ⅱ終了時に自己評価票（Glexa）による調査と、第15回の授業終了時に動画の効果と学外実習に向けた取組（Glexa）の調査を実施した。自己評価の項目は次のとおりである。10観点の達成度を（5が高い、1が低い）で評価させた。

構 想 力	幼児の実態（発達、時期を考慮）に応じたねらいとなっていたか
	実態に応じた教材（活動内容）となっていたか
	ねらいを達成できるような活動内容・環境構成になっていたか
応 答 性	集団の反応に対し、応答的にかかわりながら活動が展開されたか
	集団の様子を汲み取りながら活動が展開されたか
	困難等を自ら訴える個に対して応答的にかかわっていたか
	（意欲や内容理解などの理由により）活動に興味を示していない個に対して、理由や様子に応じてかかわっていたか
表 現 ・ 技 術	適切な声の大きさだったか
	表情は柔らかかったか
	幼児が理解できるように説明をしていたか

自己評価の結果を模擬保育Ⅰ・Ⅱ別に集計した。



① 自己評価

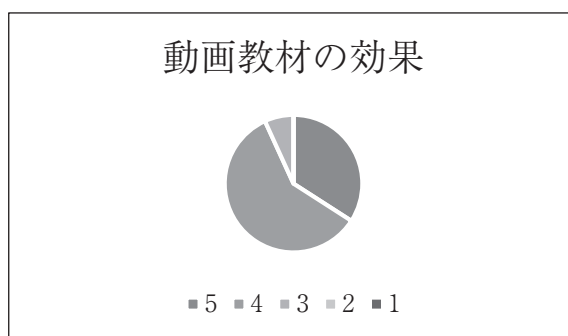
模擬保育Ⅰでは、達成度の高い4・5の回答が70%を超えている項目が「実態に応じたねらい」と「適切な声の大きさ」、60%に達していない項目が「幼児が理解できる説明」と個別対応の「困難等を自ら訴える個への対応」、「活動に意欲を示していない個への対応」であった。模擬保育Ⅱでは、4・5の回答が「幼児が理解できる説明」で60%と最も低く、次いで「興味を示していない個への応答的なかわり」が68%であった。

模擬保育ⅠとⅡを比較すると、達成度が低いとする1・2の回答数が減少し4・5の回答数が増加しており達成度が高くなっている。構想力は三つの観点で4・5の回答が80%を超えた。模擬保育の経験から応答性が向上したと認識している学生が多い傾向である。観点を意識しながら経験を重ねた効果であると推察する。模擬保育Ⅱ自己評価で1・2と回答している学生がおり、学外実習を含めた指導の継続が必要である。

② 動画教材

動画教材の効果は、4・5の回答が93%で効果的に活用できている。自由記述内容から、4・5の回答とした理由は、客観的に模擬保育の様子を見て幼児の動きと保育者の様子（言葉かけ、対応、姿勢、立ち位置）等を把握して、良かった点と改善点を見つけることができた。3と回答した理由は、授業後に視聴しなかったことや1回目は活用できず2回目から活用できた等の理由であった。

興味深かった回答として、「体感した時間と実際の時間の差に気づいた」と記載があった。5分程度かかったと思っていたが実際には3分程度であったなど、焦り気味の行動の要因に自身で気づいていた。



③ 学外実習に向けた取組

学外実習に向けた取組として、振り返りで体感した時間と実際の時間に差があることを発見していたことが挙げられる。体感時間と実際の時間に2分程度のずれがあることに気づき、焦って進めようとする要因を認識していた。

観察力としては、幼児の実態把握と保育者の援助において上手くできなかったことをもとに、学外実習での取組が明確になってきたと回答があった。実態把握の重要性を学び、質問や観察で指導案作成に必要な実態を把握する。模擬保育において幼児役になり切れていないことを自覚し実習での観点を意識した、保育者が遣う言葉や伝わりやすい説明に着目して理解したいなどに集約される。

保育内容については、幼児が気づき発見することで遊びが展開する環境と援助、応答的な対応の実際、予想外のことが起きた際に幼児の気持ち汲み取る援助を理解する。そして、ねらいを反映した保育内容について幼児の反応から学ぶ等であった。

3 成果と改善に向けた課題

1) 課題の把握と克服に向けた取組

模擬保育の振り返りと指導案検討に重点を置き、模擬保育Ⅰ・模擬保育Ⅱで計10回の模擬保育に取り組むことで、省察の有用性が把握できた。特に模擬保育Ⅱでは、課題克服に向け模索しながら取り組んでいる実態を確認した。模擬保育では、幼児役と保育者役を経験するため、両者からの気づきを得ることができていた。

PDCAサイクルにより自身に変化していることを自覚することは、学外実習での取組を明確にする

ことにつながる。自己認識と具体的に課題発見をすることにより、履修学生一人ひとりが焦点化した観察を意識することが期待できる。学外実習では、保育者から学んだ内容を幼児に対して実践することができる。3年次から4年次にかけて目的意識を持って実践する経験を重ねることを目指したい。

模擬保育の振り返りと指導案検討に重点を置いたことによる成果が確認できたが、模擬保育Ⅱ指導案作成の着手が遅くなる学生がいた。次年度は見通しをもって次の課題に取り組めるように指導を改善する。

2) 指導案の書き方指導

指導案の書き方指導については、2年次に保育内容の指導法として領域別に5科目を履修する。本科目履修前には、10作程度の指導案作成と模擬保育を経験している。本授業では、既習科目の学びを踏まえて指導している。全15回の授業終了後に授業担当者と指導案について協議した。個別指導のウエイトが増していることから、全体指導の内容を見直すこととした。そこで、保育内容の指導法の授業担当であり、本科目の担当でもある4名の教員で授業資料を持ち寄り、指導内容と指導法を共有した。現行の教育課程施行時に、共通理解のもとで各授業での指導を開始した。コロナ禍で授業形式の変更を余儀なくされ施行後の確認作業に取り組みにくい状況であった。この機に共有できたことで、共通の内容による指導内容と領域の特性を活かした指導法を確認した。学外実習での部分実習の内容も参考に、指導案の書き方指導を検討する。